

アーティスト・ファイル2013-現代の作家たち
国立新美術館 企画展示室2E

会期：2013年1月23日[水]-4月1日[月]
休：火曜日

開館時間：10:00-18:00 金曜日は20:00まで ※入場は閉館の30分前まで
住所：東京都港区六本木7-22-2
アクセス：東京メトロ千代田線 乃木坂駅 青山霊園方面改札6出口直結
問合せ：03-5777-8600(ハローダイヤル)
URL：http://artistfile2013.nact.jp/

「アーティスト・ファイル」は、国立新美術館が開館以来取り組んできた、現代美術の展覧会プロジェクトです。特定のテーマを設けず、国内外で注目すべき活動を展開する作家を個展形式で紹介し、5回目となる今回は海外作家3名を含む8名の作家が選ばれ、そのうちの1人として本学美術学部教授 中澤英明先生が参加しています。



中澤英明
《子供の顔-おっさま》
2006年
テンペラ、油彩、白亜地、綿布、板
写真：福岡栄

絵画、それを愛と呼ぶことにしよう vol.9 小林正人+杉戸洋
gallery αM 武蔵野美術大学

会期：2013年2月9日[土]-3月23日[土]
休：日月祝

開館時間：11:00-19:00
住所：東京都千代田区東神田1-2-11アガタ竹澤ビルB1F
アクセス：都営新宿線 馬喰横山駅 A1出口より徒歩2分
問合せ：03-5829-9109
URL：http://www.musabi.ac.jp/gallery/

gallery αMは武蔵野美術大学が運営するギャラリーです。2012年度の企画αM2012『絵画、それを愛と呼ぶことにしよう Crazy for Painting』(企画:保坂健二郎)のvol.9にて、本学デザイン学部教授 杉戸洋先生が参加しています。



小林正人・杉戸洋 「love all」2012
画像提供: gallery αM

VOCA展2013 現代美術の展望-新しい平面の作家たち
上野の森美術館

会期：2013年3月15日[金]-3月30日[土]
休：会期中無休

開館時間：10:00-18:00
住所：東京都台東区上野公園1-2
アクセス：JR上野駅 公園口より徒歩3分
問合せ：03-3833-4191
URL：http://www.ueno-mori.org/voca.html

VOCA展では全国の美術館学芸員、ジャーナリスト、研究者などに40才以下の若手作家の推薦を依頼し、その作家が平面作品の新作を出品するという方式により、全国各地から未知の優れた才能を紹介していきます。本学卒業生からVOCA奨励賞を柴田麻衣さん、大原美術館賞を佐藤翠さんが受賞しました。



VOCA展2013 VOCA奨励賞
柴田麻衣 「Lakeside」
オイルパー、アクリル、パネル [194cm×390.9cm]
撮影：上野則宏



VOCA展2013 大原美術館賞
佐藤翠 「Reflections of a closet」
アクリル、綿布 [227.3cm×363.6cm]
撮影：上野則宏

編集後記

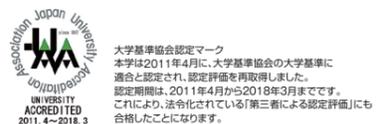
人の五感の中で一番記憶に直結しているのは嗅覚だそうです。しかも他の感覚よりも、より鮮明で感情的なものです。今回の特集は「私のスーベニア」。私は「お土産」と聞くと何かワクワクするような、でもちょっと切ないような感じがするのですが、それはお土産が、写真では持てられない嗅覚や触覚を(時には味覚も)含めた旅の感情を呼び起こす装置だからなのかも。旅立ちの季節です。卒業生もこれから来る新入生も、沢山の楽しい「お土産」に出会えますように。

惣城友美(アート&デザインセンター)

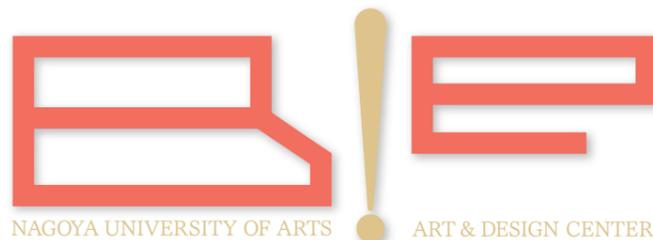


最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄大山線(地下鉄有楽町線乗り入れ)徳重-名古屋大駅下車西へ約1.1km(徒歩15分)
※急行一本急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄大山線をご利用ください
西春駅から北西約2.4km(徒歩14分)、西春駅からはタクシーの便もあります

自動車をご利用の場合
名神-宮インターから11分、名神小牧インターから15分



大学基準協会認定マーク
本学は2011年4月に、大学基準協会の大学基準に適合と認定され、認定評価を再取得しました。
認定期間は、2011年4月から2018年3月までです。
これにより、法令化されている「第三者による認定評価」にも合格したことになります。



NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS

ART & DESIGN CENTER NEWS

私のスーベニア
Souvenir

「名物に旨い物なし」という言葉がありますが、本当にそうでしょうか？
ご当地ブーム、地域資源の活用、アートやデザインによるまちおこしなどが謳われる昨今、意外にも地元の人知らない「名物」や「お土産」が話題になることも少なくありません。心に残る「私のスーベニア」...。地域の魅力を伝えるアートやデザインの発信力に、思いを巡らせてみましょう。



名古屋芸術大学デザイン学部
ヴィジュアルデザインコース作品展
『ナゴヤ展』
2013年1月22日[火]-27日[日]
アートスペース エーワン

2013年1月の中旬、名古屋芸術大学西キャンパスのB棟とG棟を繋ぐ通路に五色のバナーが架かった。デザイン学部ヴィジュアルデザインコースの3年生が「ナゴヤ」をテーマとした企画展を開催した。企画のPRも含めて学生達がプロデュースし、今回で5回目となる。

学内でのPRの一つとして、学食のメニューに期間限定でナゴヤ展メニューが登場。



ハンカチを使った封筒
言葉を伝えたいのなら、メールで送れば一瞬で届く。だけど手触りと共に届けることで、それを使う度に、アイコンを見る度に、言葉にならない記憶を伝えるツールになっているように感じられた。



50名限定で
お土産(きしめん)が
手渡された。



「きしめんフォント」を
使った紙袋と包装紙。



会場に入るとまず目に飛び込んでくる「なご湯」の文字



ナゴヤ語事典
いわゆる有名な名古屋弁から「これって標準語じゃなかったの?」と思ってしまふ言葉まで。久しぶりに名古屋へきたらしき来場者が「住んでいた時は、こんな言葉を使っていたな」と懐かしそうに眺める姿も見られた。「B紙」がナゴヤ語だったなんて!

Open 12:15-18:00(最終日は17:00まで)日曜・祝日休館 **入場無料** どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

2/19(火)→2/24(日) 第40回名古屋芸術大学卒業制作展

4/3(木)→4/17(水) デザイン学部レヴュー選抜展
※4日-7日は休館

名古屋芸術大学 Art & Design Center
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 TEL [0568]24-0325 FAX [0568]24-2897

Ble Vol.36
発行日 2013年2月18日
編集 高橋綾子(美術学部美術文化コース)/惣城友美(アート&デザインセンター)
発行 名古屋芸術大学アート&デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 E-mail adc@nua.ac.jp URL http://www.nua.ac.jp
2012 Printed in Japan © Art & Design Center, Nagoya University of Arts デザイン/印刷 サンメッセ株式会社

私のスーベニア

souvenir

旅先で、思い出や実用のために買う、自分へのお土産。あるいは、「あの人なら喜んでくれるかな?」「ちょっとした話の種にどうかしら?」などと思いを馳せて買う品々。それを求めた土地や、持ち主となった人との固有の関係が、それぞれに築かれていきます。そんな「私のスーベニア」の逸品・珍品(!?)のあれこれを、本学のスタッフ達が紹介しましょう。

ランプと鉢(エジプト・ギーザ出土)



ギーザスフィンクス修復時(1988年)入手。
神戸峰男
(美術学部教授)

懐中時計



金製は祖父、銀製は父からの長寿願う土産物。「きんが一番!」「ぎんが一番!」と呼んでる我が家宝です。
大崎正裕
(美術学部教授)

(借りぐらしのアリエッティならぬ) 独ぼっちのマサイエッティ



2010年に、展覧会のため学生たちと招かれた、北米パーモントの現地作家の自宅の窓越しに、屋外のベランダに独り座る私が、小さな(おじさん)妖精に見えたので撮られた一枚です。
西村正幸
(美術学部教授)

木馬



ネパールで見つけた80cm位の木馬、ホテルまで抱えてきてくれた子もお父さんになっているんだろうな。
荒木紀江
(美術学部准教授)

タジンの鍋



旅行先から調理器具を持ち帰り、そこで食べた料理を自宅で再現するのが楽しみです。パリの朝市で見つけました。
副千花
(デザイン学部准教授)

ネーデルラントの17世紀レーマー杯



10年程前に、アムステルダムを訪れた時に手に入れた、小振りな可愛いグラス。本物の意匠が魅力的で、当時の静物画にもモチーフとして時折登場する。特別な日にワインを入れて飲めば気分はフェルメール。
須田真弘
(美術学部准教授)

ニワトリ



スウェーデンの田舎で見つけた「にわとり」。かしわ実家が「鶏肉屋」。幼い頃を思い出させてくれます。
久野利博
(デザイン学部教授)

これは何でしょう?直径9センチ木の玉イタリヤ



上下の半球を手を持って回転させると、上下の窪みが少しずつ狭くなり、食に関わる道具になります。
平田哲生
(デザイン学部教授)

木製家具調厚型「TELEV」?



貯金箱仕様+子芥子人形式体付。「白浜」土産(見上)寸法/104×78×60ミリ
落合紀文
(デザイン学部教授)

どこにでもあるお土産



別の国なのに同じような植物の葉で作られています。ラクダはモロッコの砂漠の町で、真っ黒に日焼けした兄弟が買って、買ってと寄ってきて買ったもの。バックはタイのアユタヤで炎天下の寺院の参道で、傘にすっぽり隠れて暑さをしのいで全く商売気のない小さな姉弟から買ったもの。
榎田珠実
(デザイン学部准教授)

ゾウの像



はじめてのインド旅行。エレファント島で見た石窟寺院のシヴァ神を、このゾウが思い出させてくれます。
高橋綾子
(美術学部准教授)

インドの洗濯バサミ



私は洗濯バサミを愛する。これはインドに行った学生から頂いたもの。この形、色、ザ・モダンインドです。
萩原周
(デザイン学部准教授)

革の軍手



外国を旅行すると、その国の建築事情を知るのに、大工道具店を覗きます。ベニスで買った、安価でカラフルな革の軍手。最近始めた家庭菜園で大活躍です。
駒井貞治
(デザイン学部講師)

離島戦隊サダガシマン ミルクキャラメル



佐渡島出身の友人のお土産、離島戦隊サダガシマン! シマナガシブルー、トキレッド、ザクザクゴールドの3名。
今泉麗子
(アート&デザインセンター)

ホフロマ塗りのスプーン



テルミン仲間から買ったロシア土産。口当たりがやさしくて気に入っています。いつか私も行きたい。
惣城友美
(アート&デザインセンター)

レポート

REPORT 01

2012年度名古屋芸術大学デザイン学部 特別客員教授 服部滋樹 特別授業 『一夜限りの小さな晩餐会』 2012年11月13日[火] 名古屋芸術大学西キャンパス

『土と人のデザインプロジェクト』展 —ゼロから晩餐会をデザインする— 2012年11月28日[水]—12月9日[日] アートラボあいち



闇に浮かび上がる晩餐会会場

展覧会場への階段を登りきると、農業用ビニールハウスに取り付けられた白い木製ドアが来場者を迎える。この展覧会は、ある日ある場所に出現したビニールハウスでの出来事とそこに至るまでのドキュメントであり、このゲートはその証人としてここに移設されたのだ。

昨年7月、服部滋樹氏は「この地域にあるもので晩餐会をデザインする」と告げた。氏は自らの活動で「正しいものを手に入れる為に正しい仕組みでものづくりを行う」ことを常に目論んできた。そこで提示されたのは「名芸デザイン」を「地域」という新たなフィールドに覚醒させるための少々手のこんだシナリオであった。

この地域(=土と人)とデザインの実験には、学年、専門を超えて約40名の学生が臨んだ。彼等は近隣を訪ね歩き、目指すべき晩餐会像への接近を果敢に試みた。ブレない「正しさ」のための合言葉は「小さなダイヤの指輪」。そして慣れない畑の耕作から約4ヶ月、昨年11月13日に学内・外から約50名のゲストを招いて【一夜限りの小さな晩餐会】を開催した。

本展は4つのパートで構成される。《晩餐会までの私たちの歩み》では、テキストとともに豆腐屋の値札、ふそろいの廃材、そして野菜づくり指南役愛用の靴や長靴などが配置された。当日の長テーブルを足下の芝ごと移設したパートとあわせ、幾多の実物が出来事の証言者となって時を超える。《広がった人と人のコミュニティ》では、人々と出会いたぐり寄せた地域そのものがダイヤグラムとなって立ち現れ、そして《晩餐会後の大学・地域の未来》には、彼等が掘り起こした様々なかたちの「資源」がこの地域の未来に「小さなダイヤ」の原石としてちりばめられた。

服部氏の構想を超えて、このシナリオはしかしまだここでは完結しない。ここに読み解かれた「資源」が新たな関係性を取り結び、何かを生み、そしてそれがこの地域の日常となる日はまだ遥か遠くにかすんで見えているだけだ。

萩原周 デザイン学部准教授



ビニールハウス?での晩餐会



ビニールハウスでの生演奏



配膳を待つメインディッシュ「野菜ずし」



展覧会場に移設されたビニールハウスのゲート



《晩餐会までの私たちの歩み》の一部



再現された晩餐会の長テーブル

ART WORDS FROM THE ART WORLD

芸術一話 第12話 些細な違和感から世界は創られる。



「Toys Paradise」制作年 2010 アーツ千代田3331

美術家・十和田市現代美術館副館長 藤 浩志 Hiroshi FUJI

あたりまえの話…地球上のほとんどのものは人によってつくられてきたという事実。人の営みの結果として今の風景がある。身の回りの生活用品、建築物から道路、まちなみ、山や海岸線の形で、多くの人のアイデアやイメージを経由してその時々で「いい」と思われつくられてきた。だいたい20代後半から50代後半ぐらいまでの年齢の人がその時々で「いい」と思うのが商品化され、流通し、今の風景を作ってきたといえる。そしてそれらの風景はずっと更新され続けられる運命にある。30年後の風景は今現在現場で作り出している人と、これから生まれてくる人の「いい」という価値観が混在し形作られる。

問題は…その「いい」という価値観のイメージはどこからくるのかということだと思ふ。いまだに流通していない見てもないイメージはつねに今の風景を形成しているモノやそのありかたの違和感から発生すると考えている。つまり「何かが違うな」と感じる些細な感情が重要で、それに向かう感性と、その先に何かがあるに違いないと思う「根拠のない自信」から次のイメージは発生する。前の世代の人が作ってきた明確なビジョンやコンセプトなどに頼ることなく、現在流通しているアートとか芸術の魔術に騙されることなく、心によぎる些細な違和感に切実に向かい合う態度。そこから何かが発生した時に次の時代の風景をつくる貴重な種となる。そんなかんじじゃないかな…。